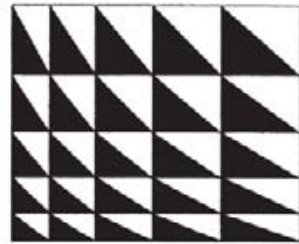


モノグラフ・高校生'84

vol.11「おとなになる」ことのイメージ

©1984(株)福武書店 教育研究所/加藤智博・賀川雅子・遠藤純子
放送大学教授 深谷昌志・東京学芸大学大学院 前田一美



見本

目次

はじめに 成長欲求の考え方……………2

本報告書の要約・サンプル……………4

第I章 今の社会をどう
見ているか……………5

1. おとなに対するイメージ……………5
2. おとなになるための条件……………11

第II章 どんな人生を送ることに
なるのか……………14

1. 進学か、それとも就職か……………14
2. 職業についての見通し……………20
3. 将来の生活に必要なもの……………24

第III章 生徒たちの成長欲求……………30

1. 「おとなになりたくない」……………30
2. 成長欲求の開き……………33

資料1 調査票見本……………38

資料2 基礎集計表……………48



はじめに ●

成長欲求の考え方

現代は幼児化の時代だといわれる。そして、おとなであることに、なんとなく、やぼったく、そして、古めかしいような印象を受ける。

そうした傾向を反映してか、このところ、おとなになりたがらない若者が増加している。モラトリアム傾向がその典型であろうが、生徒たちは、子どもである状況は卒業したものの、おとなでもない、いわば、宙ぶらりんの状況の中に身をゆだねている。

それでも、かつての青年たちは、そうした境界人的な青年文化に独自性を見い出して、既成のおとな文化に組みこまれまいとするプロテストの態度を示すのが通例であった。青年の文化が、つねに対抗文化であったのがその例証であろう。

しかし、現代の青年たちは、おとなでも、そして、子どもでもないそうした境界的な青年文化をありのままに受けとめ、むしろ、そうした状況に安住しているように見える。

なにも急いでおとなになる必要はない。おとなになれば、いろいろなやなことしなければならぬし、それよりもまず、働かねばならない。いずれそうした生活を送る日が来るにしても、その日の訪れを一日でも遅くしたい。

青年であることは、義務から解放され、好きなことのできる自由を持っているのを意味している。青年のそうした特権を返上するのは愚かなことだというのである。

もちろんそうした青年の態度は、豊かな社会の中で生まれた甘さに根をおろしているのは否定できない。

しかし、いずれにせよ、青年たちはおとなになる気持ちをなくし、青年である状況がいつまでも続くのを願っている。成長しようという気持ち、つまり成長欲求の低下した青年たちである。

そうしたおとなになるのを拒否する態度は高校生の間にも認められるが、そうした態度はどこから生じ、そして、どんな意味を持つのか、というより、本当に生徒たちは、おとなになる気を失ってしまったのか。それを考えようとしたのが本報告書である。

放送大学教授 深谷昌志
東京学芸大学大学院 前田一美

調査の企画

高校教育研究会

代表 深谷 昌志（放送大学教授）
武内 清（武蔵大学教授）
明石 要一（千葉大学助教授）
石崎 廣義（私立城北高校教諭）
仁平 正男（東京都立八王子東高校教諭）
蒲生真紗雄（東京都立武蔵高校教諭）
尾澤 弘恒（東京都立荻窪高校教諭）
穂坂 明德（神奈川県立平安高校教諭）
田中 雅文（三井情報開発研究員）
耳塚 寛明（東京大学助手）
樋口大二郎（東京大学大学院）
苧谷 剛彦（東京大学大学院）
吉本 圭一（東京大学大学院）
前田 一美（東京学芸大学大学院）

本書の執筆担当

深谷 昌志
前田 一美

本報告書の要約・サンプル



①生徒たちは、現代の社会を「自分勝手な人が多く」「社会道徳が乱れている」と思い(図Ⅰ-1)、100点満点で採点して57点の社会と評価している(表Ⅰ-2)。

②生徒たちによると、おとなになるためには、「自分のことに責任を持つ」ことが必要で(図Ⅰ-6)、そうしたおとなには、24歳ぐらいにならないとなれないという(表Ⅰ-5)。

③生徒たちは、個性を生かせる仕事につきたいと思っている(図Ⅱ-5)。しかし、職業生活で成功するのはとても難しいと考えている(表Ⅱ-3)。

④幸せな生活を送るのに必要なのは、なによりもまず、健康である(図Ⅱ-8)。そして「平凡でいいから安定した人生を送りたい」

と考えている(表Ⅱ-4)。

⑤おとなになりたい生徒となりたくない生徒とは、ほぼ半々の割合である(図Ⅲ-1)。

⑥現在の自分に自信を持てる生徒は、はやくおとなになりたいと思っている(図Ⅲ-5)。

サンプル数

全体	1,535名
内訳	男子 827名
	女子 708名
一年生	590名
二年生	441名
三年生	504名

第 I 章 今の社会をどう見ているか



1. おとなに対するイメージ

現代青年の青年期は、長期化しているといわれる。物質的豊かさや、高学歴社会の形成が、そうした変化を促したともいわれる。

そこでまず、現代の社会状況について、青年たちがどんな評価をくだしているのかをさぐってみることにしたい。

社会に対する意見を7つほど用意して、それらを肯定するかどうかを尋ねてみた。結果は図I-1が示す通りであるが、「自分勝手な人が多すぎる」については54%、また「社会道徳が乱れている」は45%の生徒たちが、「全く、あるいは、かなりその通り」だと答えている。また「人々の意見が政治に生かさ

れている」についても、「かなり、あるいは、全く違う」に着目してみると45%に達する。つまり、社会道徳や秩序に強い不満をあらわにしているのは、約5割の生徒たちである。また、これらの数値に「やや」も加えると、それぞれ9割にも達する。しかし、そうした反面、「誰でも努力すれば幸せな生活を送れる」では、「やや」も含めると66%の生徒たちが肯定的な評価をくだしている。

総じて見るならば、世間には、利己主義の人間が多く、とても住み良い社会とはいえない、しかし、まじめに努力すれば報われる面もあるから、まんざらすてたものでもない

といったところが、高校生たちの抱く社会観といえよう。

それでは、属性によってそうした評価はどう変わってくるのであろうか。結果は表I-1が示す通り、数字は必ずしもシャープではないが、男子生徒の方が世の中を否定的に見ている割合が高い。しかし、「とても住み良い社会だ」をその通りだと答える割合は、男子10%、女子5%と、女子生徒の方に否定的な反応が強い。この世の中は、まだまだ男性中心の社会であることからの不利益が生じそうなことが、平等な学校社会に住む女子生徒にも感じられるのであろうか。また、世の中を否定的に見る傾向は、学年が上昇するにつれて強くなっている。これは年齢とともに、自分なりの考え方が形成されていくため、批判的傾向も順々にはあるが強まっていく結果と考えられよう。青年本来の批判的な特質が、成長とともに表出してくる様子がかうかえよう。

それでは、そうした世の中は、これから先どうなるのであろうか。図I-2は、生徒たちがおとなになった時の社会が、今の社会と比べてどうなるかを予想してもらった結果である。

「とても、あるいは、かなり悪くなる」と考えている者に着目して見ていくと、「自然などの環境」で7割、「食生活の面」と「人々の暮らし」を除くと、その他でも3~4割の生徒が強い危機感を抱いているのがわかる。しかし、そうはいつても、「人々の暮らし」や「食生活の面」になると2割から2割強の生徒しか危機感を持っていない。つまり、社会環境が悪くなるといつても、いまひとつ切実に欠け、自分たちの日々の生活にはあまり影響がないだろうといった、きわめて楽天的な見方をしているように見える。高校生たちは生まれてこのかた、平和な社会の中で暮らしてきた。したがって、平和で暮らし良い社会が今後も続くと思っている。

図I-1 世の中についての評価 — 自分勝手の人が多い —

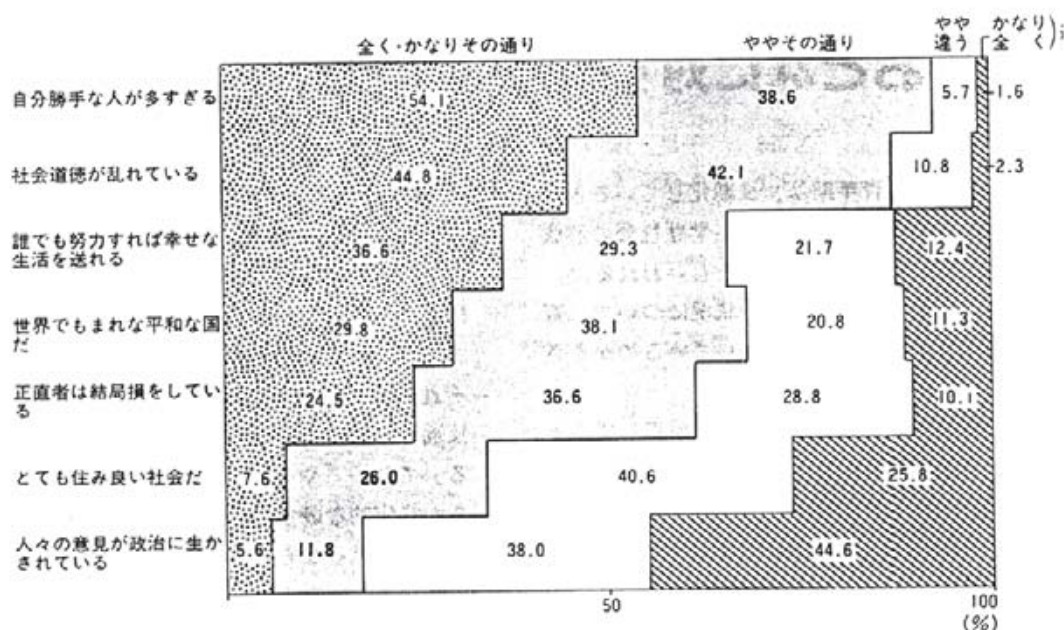


表 I - 1 世の中についての評価×属性

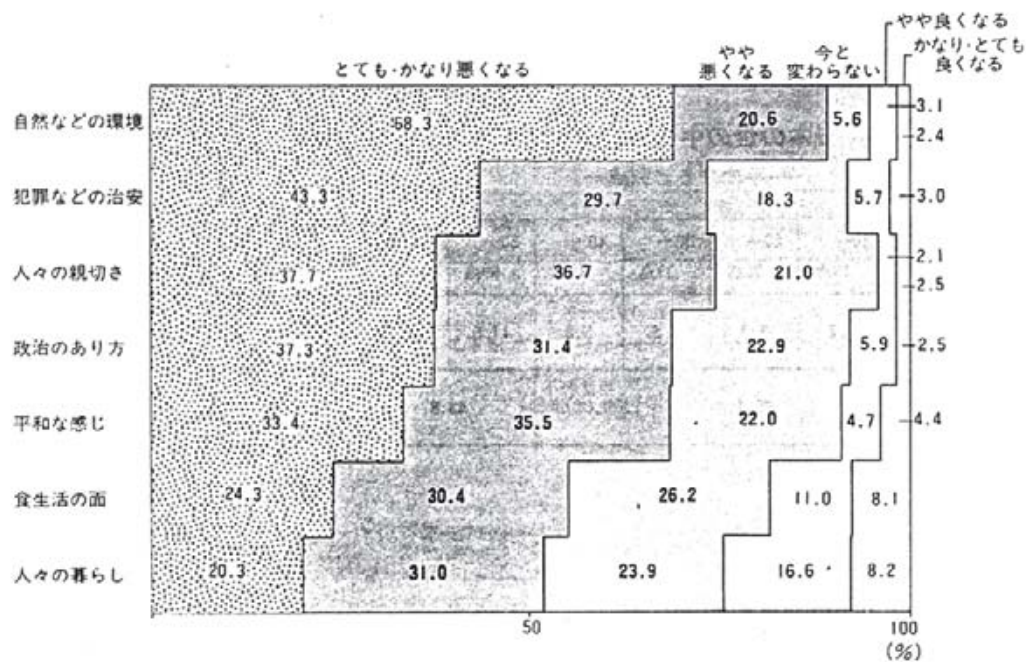
(%)

項目	属性	性別		学年		
		男子	女子	1年	2年	3年
マイナスイメージ	自分勝手な人が多すぎる	56.9	50.6	54.0	53.1	54.9
	社会道徳が乱れている	47.4	41.6	44.9	44.6	44.7
	正直者は結局損をしている	28.2	20.2	21.2	25.3	27.8
プラスイメージ	誰でも努力すれば幸せな生活を送れる	36.4	37.0	39.5	37.0	33.0
	世界でもまれな平和な国だ	33.6	25.2	32.8	27.7	28.0
	とても住み良い社会だ	10.2	4.6	7.2	8.1	7.8
	人々の意見が政治に生かされている	6.7	4.4	5.6	5.3	6.0

全くその通り かなりその通り ややその通り やや違う かなり違う 全く違う
 (％)

図 I - 2 これから先の社会展望

——やや悪くなりそう——



次に、現代社会の総合的評価を表しているのが表 I-2 で、「今の日本の世の中を採点したら、何点ぐらいになると思われますか」という質問に答えてもらった結果である。

「50-69点」をつけた者は44%と、常識的に見て「ふつう」だろうという点数に数字が集中している。また「70点以上」をつけた者は31%いるので、「ふつう、あるいはそれ以上」という評価を下した者は75%にも達する。概して、高校生にとって、今の世の中はなかなかよいものであるように見える。

念のために、そうした採点がどんな規準に基づいているのかを見ることにしよう。結果は図 I-3 が示す通りで、高得点をつけた者は、社会や生活に対する不満や批判が少なく、低得点をつけた者に、批判の声が強く、世の中を否定的に見ている。中間点をつけた者はその間の反応を示している。また表 I-3 によると、学業成績の良い生徒の方が、日本を厳しく採点しているのは興味をひく傾向である。

それでは、このような社会に住むおとなを高校生はどのように見ているのであろうか。図 I-4 は、高校生のまわりにいるおとなに対する評価を尋ねた結果である。

「やや」も含めて多いのは、「毎日一生懸命働いている人」の85%、「幸せな家庭を持っている人」79%などで、これらは8割に近い高数値を示すが、しかし、その一方で「仕事の他に良い趣味を持っている人」では44%にまで下がる。日本人の働きすぎが国際的な批判の対象となり、大企業を中心として週休二日制が広がり、定着し始めている。そして、生活の意識として、「趣味にあった暮らし」や「のんきに暮らす」などが求められてはいるが、まだまだ理想にすぎないように見える。あくまで仕事中心のおとなのイメージを高校生は抱いている。もっとも、「自分に向いた仕事をしている人」の61%、「自分は幸せだと思っている人」55%が示すように、仕事中心の生活というには、自分に向いた仕事をしている人が少ない。幸せな家庭は持っているものの、何か空虚なおとなが少なくないと高校生はとらえているのであろう。

また、おとなといえども「自分の考えをしっかりと持っている人」は44%しかないと、厳しい見方をしている。どうやら生徒たちは仕事はよくやっているし、家庭的にも幸せそうだが、なにかものたりない感じもするというように、おとなをとらえているように見える。

表 I-2 日本の世の中を採点すると
——平均すると57点——

											(%)
0～ 9点	10～ 19点	20～ 29点	30～ 39点	40～ 49点	50～ 59点	60～ 69点	70～ 79点	80～ 89点	90～ 100点	平均	
3.3	2.2	3.3	7.5	8.8	17.6	26.2	19.2	8.3	3.6	56.6 点	
25.1					43.8		31.1				

図 I - 3 日本の世の中を採点する×世の中についての評価

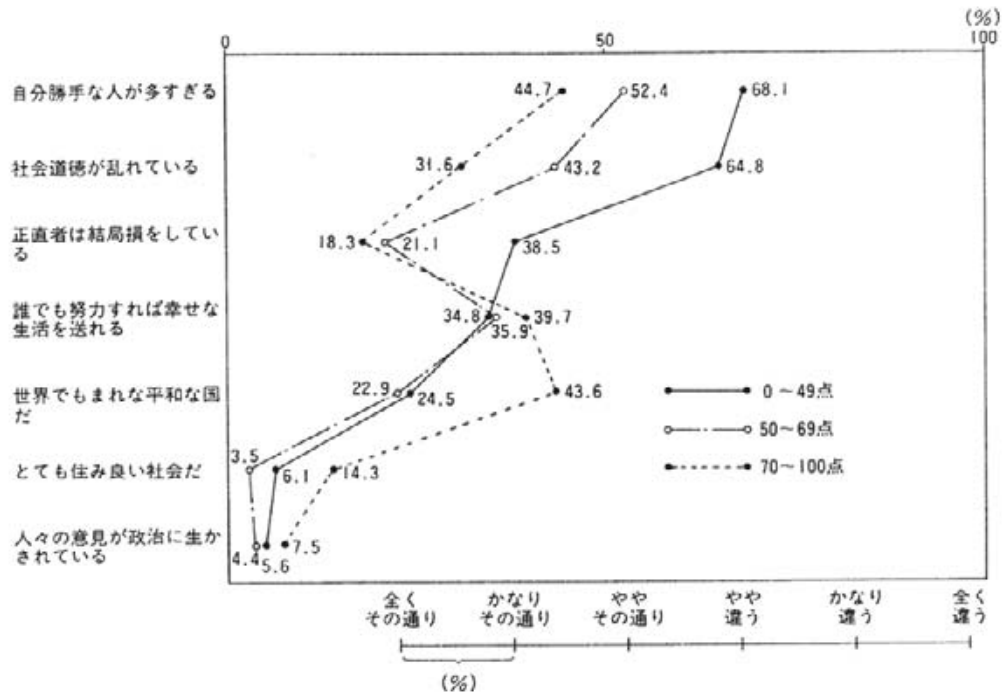


表 I - 3 成績×日本の世の中を採点すると

		(%)			
		0-49点	50-69点	70-89点	90-100点
成績	得意群	31.2	42.6	23.2	3.0
	不得意群	19.7	41.9	31.0	7.4

※ 勉強がよくできる

ぜんぜん
そう思わない

あまり
そう思わない

少し
そう思う

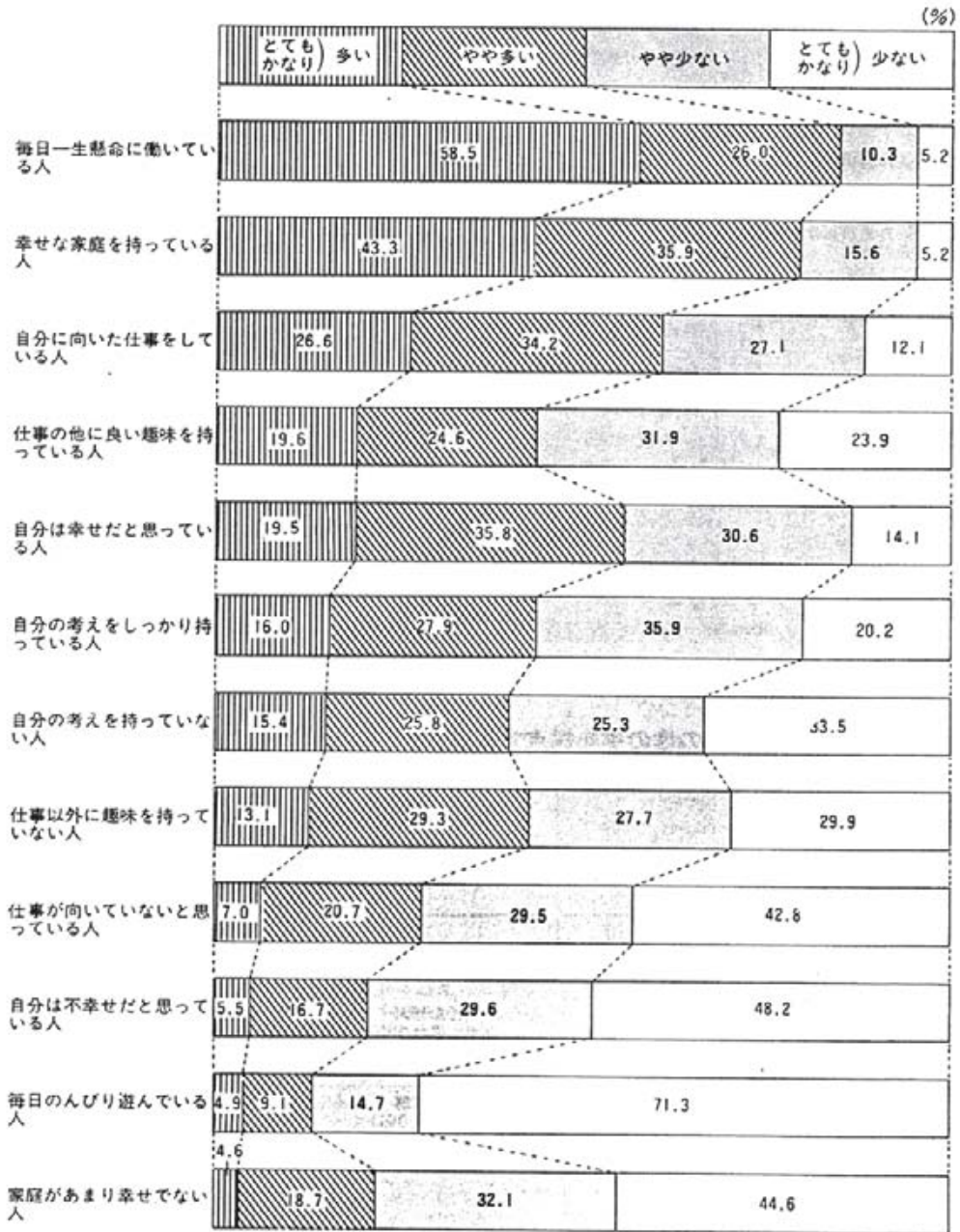
とても
そう思う

不得意群
545人(35.9%)

得意群
230人(15.1%)

図 I - 4 おとなに対する評価

———生懸命に働いている人が多い———



2. おとなになるための条件

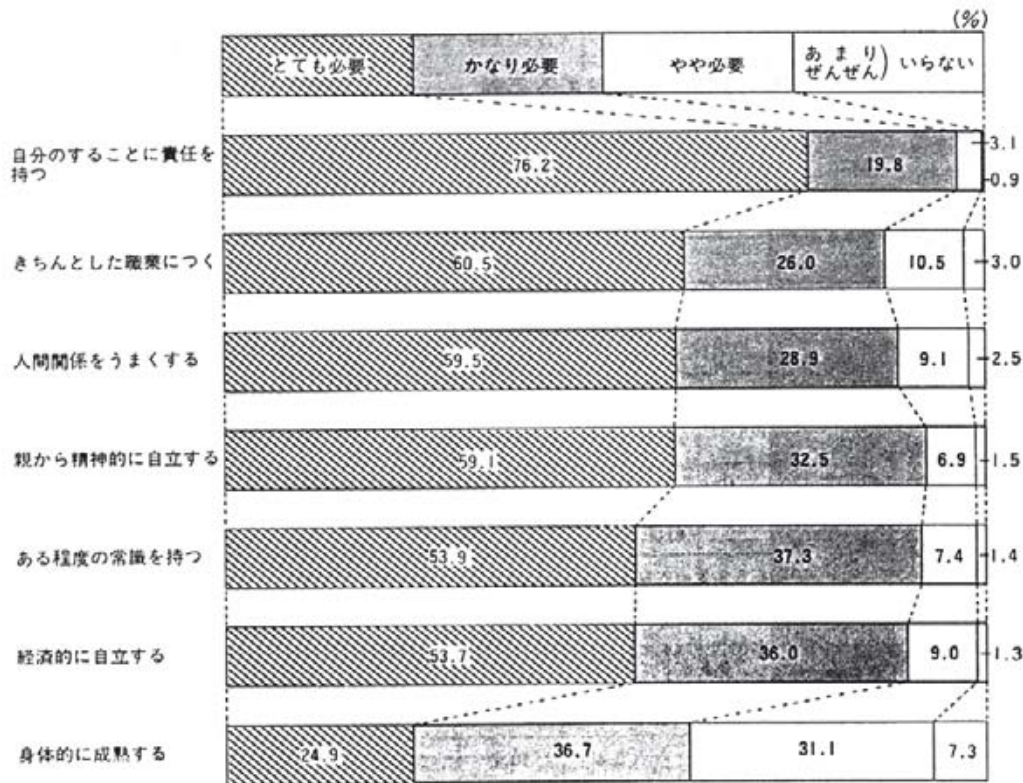
そうした高校生も、数年後には、おとなの仲間入りをしなければならない。もちろん20歳になると、おとなとは、同意語ではないが、いずれにせよ、現代の若者は、おとなになる条件をどのように考えているのであろうか。図I-5は、おとなの条件として、身体的成熟、精神的成熟、経済的成熟に関することを7つの項目で代表させ、その必要度を尋ねた結果である。

また表I-4では、それらのおとなの条件は、いつごろ、獲得できるかを尋ねた結果を示している。そしてさらに図I-5と表I-4を比較しやすいようにしたものが図I-6

である。

図I-6によると「自分のすることに責任を持つ」については、「とても必要」76%、「かなり」を入れると96%となる。そして「身体的に成熟する」を除く他の項目でも、「かなり」を含めるといずれも9割という高い数値で、おとなになるのに必要という答えが得られている。もっともここにあげてある項目のすべてが、おとなの条件として必要不可欠であり、どれが欠けてもおとなとはいいがたいことを考えると、おおむね妥当な見方のように見える。しかし「身体的成熟」に関する必要度が、「とても」で25%、「かなり」を入れて

図I-5 「おとなになる」条件 ——自分のすることに責任を持つ——



も61%と、他の条件に比べて必要度が低い。

次に右側の「おとなの条件」をそなえる年齢について見てみることにしたい。

一見して気づくのは、大学を卒業するところにならなければおとなになれないと、ほとんどの生徒たちが考えている事実であろう。

高校を卒業するところに獲得できるものは、「人間関係をうまくする」が5割を超えるだけで、以下「自分のすることに責任を持つ」、「親から精神的に独立する」ことについては、それぐらいの力は獲得できるだろうと考えている割合は5割を下まわっている。しかし、「ある程度の常識を持つ」「身体的に成熟する」では4割になり、職業や経済面に関しては、はじめなまでに獲得できないだろうとの回答がよせられている。技術革新下の高学歴社会の許では、経済的に自立するのが困難になっているのであろうが、それにしても大学を卒業しても5割の生徒しか自立できないという。これでは自立の遅れが目につくのも当然かもしれない。

さらに図I-6の中で、もうひとつ目につ

くのが、生徒たちが自分の身体的成熟を、未だしと見ている傾向であろう。近年、性的成熟の徴候は、平均して、11~12歳で現れ、3~4年間で完了するので、高校へ入るころには、ほとんどの生徒が身体的性的成熟を完了するといわれている。しかし、当の本人たちは、その事実を認識せずに、現在は未成熟で、これから先、数年をかけて身体的にもおとなになると考えているように見える。

そうした傾向はとにかくとして、青年期はますます延長される傾向にある。それでは、その青年期を脱するのはいつごろと考えているのであろうか。

一人前になる年齢についての見通しを、表I-5に要約する形で示した。全体として見るとかなり納得のできるもので、まず、自分自身で一人前と思えるのは、24歳、つまり大学を卒業して2年後にあたる。そして、世間の人も、そのころになれば、一人前とみなしてくれるだろうと思っている。しかし、それは、形式的な一人前で、社会の見方や仕事の面で一人前になるのは、それから4年ほどた

表I-4 「おとなの条件」をそなえる年齢 — 経済的な自立は遅れる —

(%)

項目	尺度						
	もうおとなになっている	高校を卒業したら	20歳になったら	大学を卒業したら	25歳位になったら	30歳位になったら	35歳を過ぎたら
人間関係をうまくする	18.0	36.3	15.0	12.2	8.6	4.6	5.3
	54.3		27.2		13.2		
自分のすることに責任を持つ	11.3	36.5	25.8	12.5	8.3	3.2	2.4
	47.8		38.3		11.5		
親から精神的に独立する	11.0	35.7	19.3	20.7	10.1	1.8	1.4
	46.7		40.0		11.9		
身体的に成熟する	10.9	30.2	39.1	12.8	5.6	0.4	0.9
	41.1		52.0		6.0		
ある程度の常識を持つ	9.3	31.1	22.3	20.5	9.5	3.9	3.4
	40.4		42.8		13.4		
きちんとした職業につく	0.5	9.6	8.2	67.2	12.8	1.1	0.6
	10.1		75.4		13.9		
経済的に自立する	0.9	5.4	10.1	31.4	38.8	10.8	2.6
	6.3		41.5		49.6		

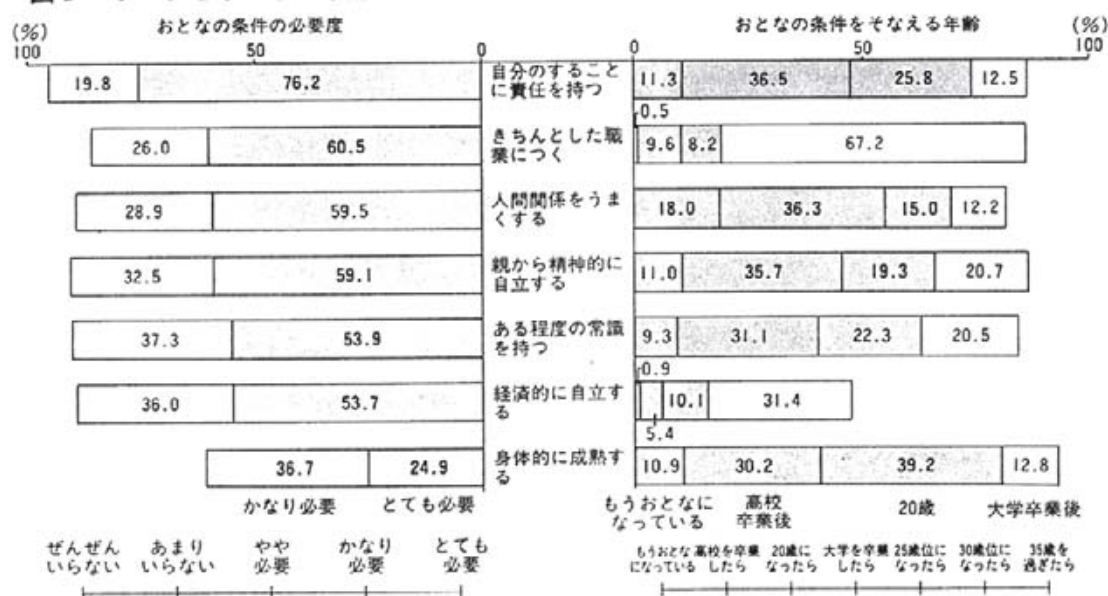
○ = 最頻値

った28歳ごろだろうという。そして、家庭人として一人前になれるのが30歳、さらに人間としての幅ができるのは34歳という見通しである。

もう一度、表I-5の1行め「自分を一人前だと思える」に戻ると、「18歳以下」では、1割の生徒が、そして「19、20歳」では3割しか、自分を一人前と考えていない。つまり、成人式を迎えても6割の青年は「おとなにな

った」とは考えていないことがわかる。法律的には、男子は満18歳、女子は満16歳になれば婚姻できる。また、20歳という年齢は、制度的には成人式を迎え、一人前の法律行為のできる資格を持つ。しかし、今や20歳という年齢は、制度的、儀式的なものになってしまい、実質的な一人前は24歳といったところであろうか。

図I-6 おとなになる年齢と必要性



表I-5 生徒が一人前になる年齢

—24歳で一人前—

項目	年 齢						平均
	18歳以下	19、20歳	21～25歳	26～30歳	31～35歳	36歳以上	
あなたが自分を一人前だと思える	10.1	29.4	38.8	15.8	2.3	3.6	23.9
世間の人あなたが一人前だと見る	5.9	34.4	37.4	17.7	2.8	1.8	24.1
社会の見方などで一人前になれる	1.8	17.0	27.2	34.9	8.3	10.8	28.2
仕事の面であなたが一人前になる	0.7	4.9	37.6	39.6	10.5	6.7	28.5
家庭人としてあなたが一人前になる	2.6	5.6	17.8	44.3	5.3	14.4	30.4
人間としての幅の広さが一人前になる	1.5	5.3	11.1	36.0	4.7	31.4	33.5

○ = 最頻値

第II章 どんな人生を送ることになるのか



1. 進学か、それとも就職か

高校生たちは、自分の人生を踏み出す直前の年齢に属している。彼らは意識していないであろうが、高校までの人生なら、進路の開きはないに等しい。しかし、高校を卒業し、進学、あるいは就職と、進路が分かれてくると、一人ひとりの生徒は、それぞれの人生を歩み始める。

そうした進路選択の時を目前に控えて、彼らは自分たちの将来に、どのような展望を抱いて生活しているのだろうか。ここでは、将来展望を大学、職場、家庭生活と、3つの場面に分け、その可能性を答えてもらう形をとった。

結果は図II-1の通りであるが、一見して生徒たちの見通しの暗さが目につく。そこで「たぶん、あるいは、絶対可能」に着目してみると、「大学へ入学できたら、充実した学生生活を送れる」46%、「職場で自分らしさを発揮できる」33%、「結婚したら幸せな家庭生活を送れる」55%となる。つまり、生徒たちは全体として暗い見通しの中で、大学生活と家庭生活に明るさを見い出そうとしている。大学を卒業できたとしても、望み通りの仕事につけそうもない。しかし、良い子に恵まれ、幸せな家庭は作れるだろうという見方である。

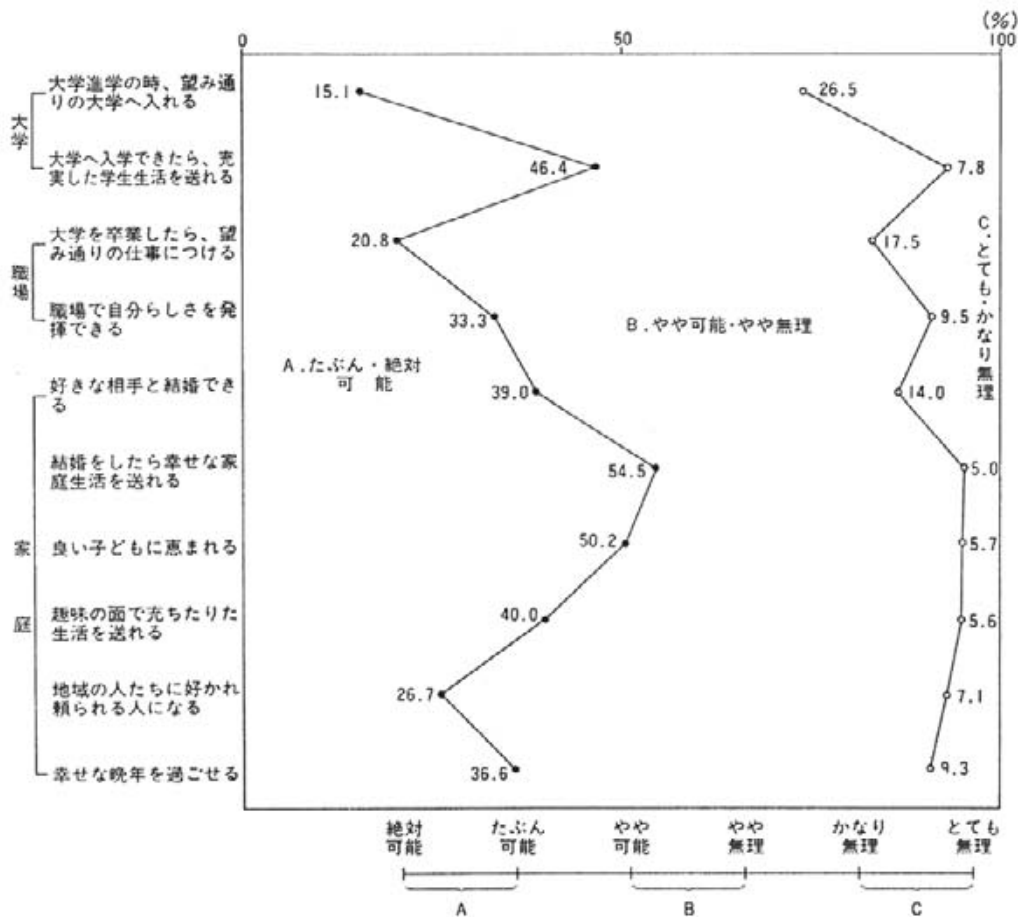
それでは、将来の見通しを、もう少し属性別に見てみることにしよう。まず、図II-2に、学業成績別に見た将来展望で、「たぶん、あるいは、絶対可能だと思う」割合を図示したものである。

将来の見通しは、成績の良し悪しと深い関係を示し、成績が不振気味になると、現在だ

けでなく、未来について、それも学生生活や社会的達成にとどまらず、将来の家庭生活に対しても見通しが暗くなっていることがわかる。

次に図II-3に、体力についての自信による結果を示したが、ライフステージでのどの場面においても、体力に自信の持てない者の

図II-1 将来展望 —見通しは暗い—

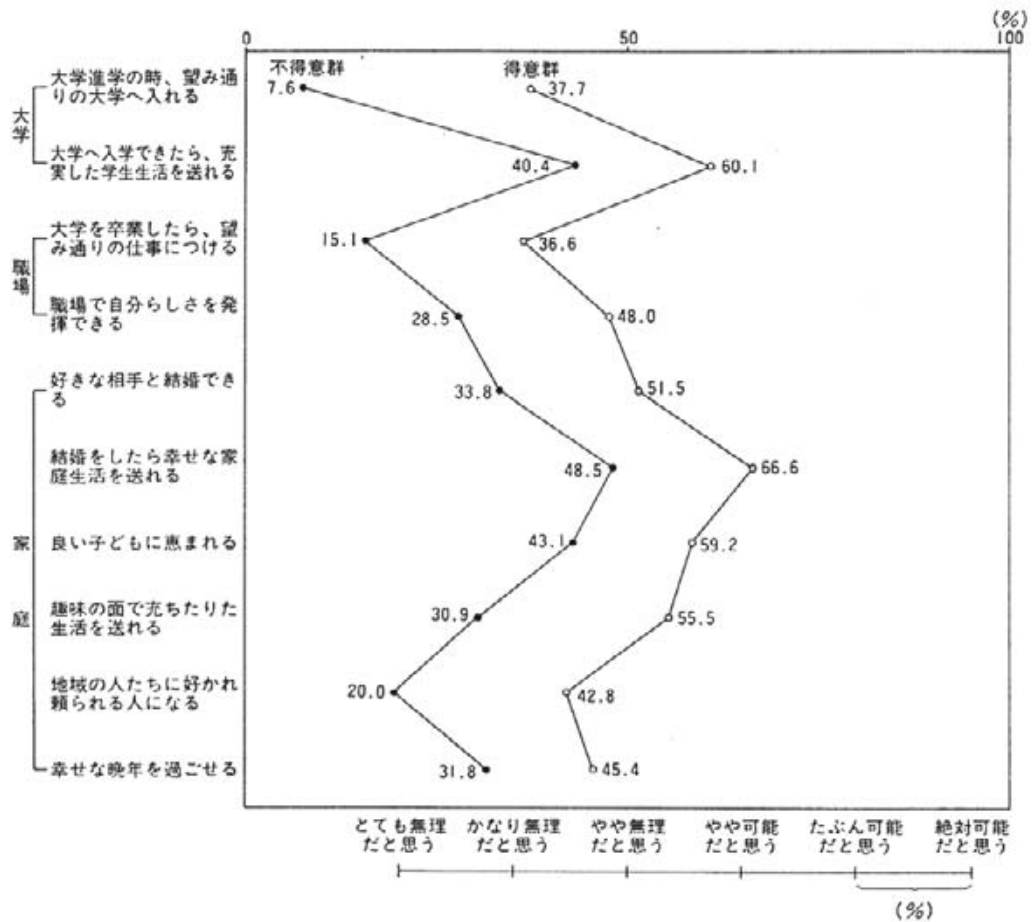


見通しの暗さが現れている。しかし、成績の場合とことなり、大学生生活については、さほど差は認められないが、社会人となり、家庭人となるにつれて大きな開きが生じてくる。職業、あるいは家庭生活は、生徒たちにとって遠い先の問題であり、とりあえずは、進

学、もしくは就職に当面する。

そこで、あらためて、生徒たちの希望している進路を紹介すると、表II-1の通りで、本サンプルの場合68%が4年制大学への進学を予定している。これに短大を含めると、78%と8割近い生徒が、大学進学を予定してい

図II-2 成績×将来展望 ——成績がよいと見通しも明るい——

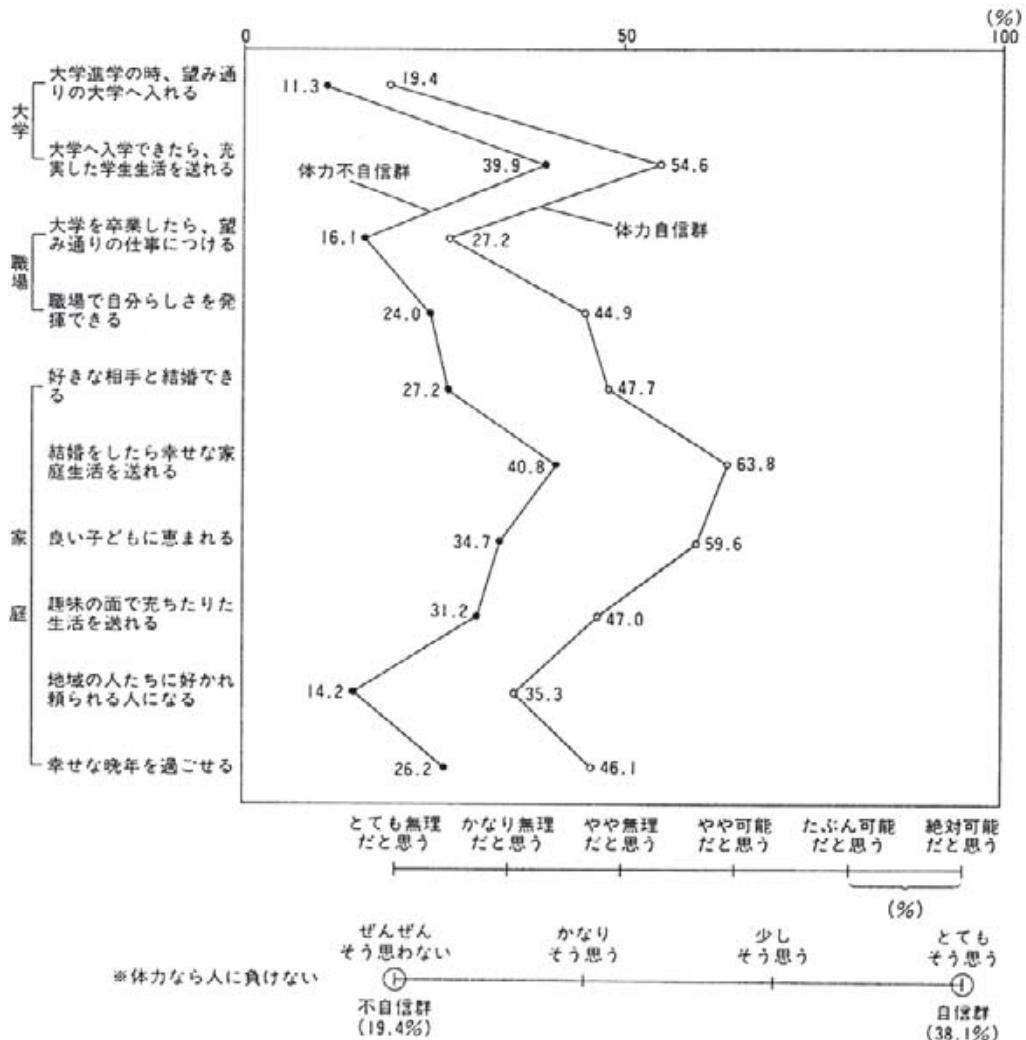


る計算になる。そして就職する生徒は8%で、ほんの少数派である。

次に学年別に見ると、学年が進むにつれて進学することへの不向きに気づいたのか、それとも他に価値を見出したのか、進学希望から就職希望へ進路を変更する者が目につく。

また性別では、4年制大学を希望する者は、男子85%、女子48%と、断然男子に多く、女子は専門学校や短大を希望する者が多い。そして勉強に関しては、当然のことながら、勉強の得意な生徒に難しい大学を希望する者が多く6割に達し、短大や専門学校を希望する

図II-3 体力×将来展望



者は1割にすぎない。しかし勉強を不得意とする生徒は、短大、専門学校へは、33%も希望している。

さらに体力によっては、大学への進学率は変わらないが、体力に自信のある生徒で、難しい大学へチャレンジしようとする者が多い。

それでは、進学、あるいは、就職を心に抱くことは、それから先の人生にどのような影響を与えるのであろうか。

その一端をとらえようとしたのが、図Ⅱ-4だが、この中から、きわだった傾向を要約すると、

表Ⅱ-1 将来の進路予想

(%)

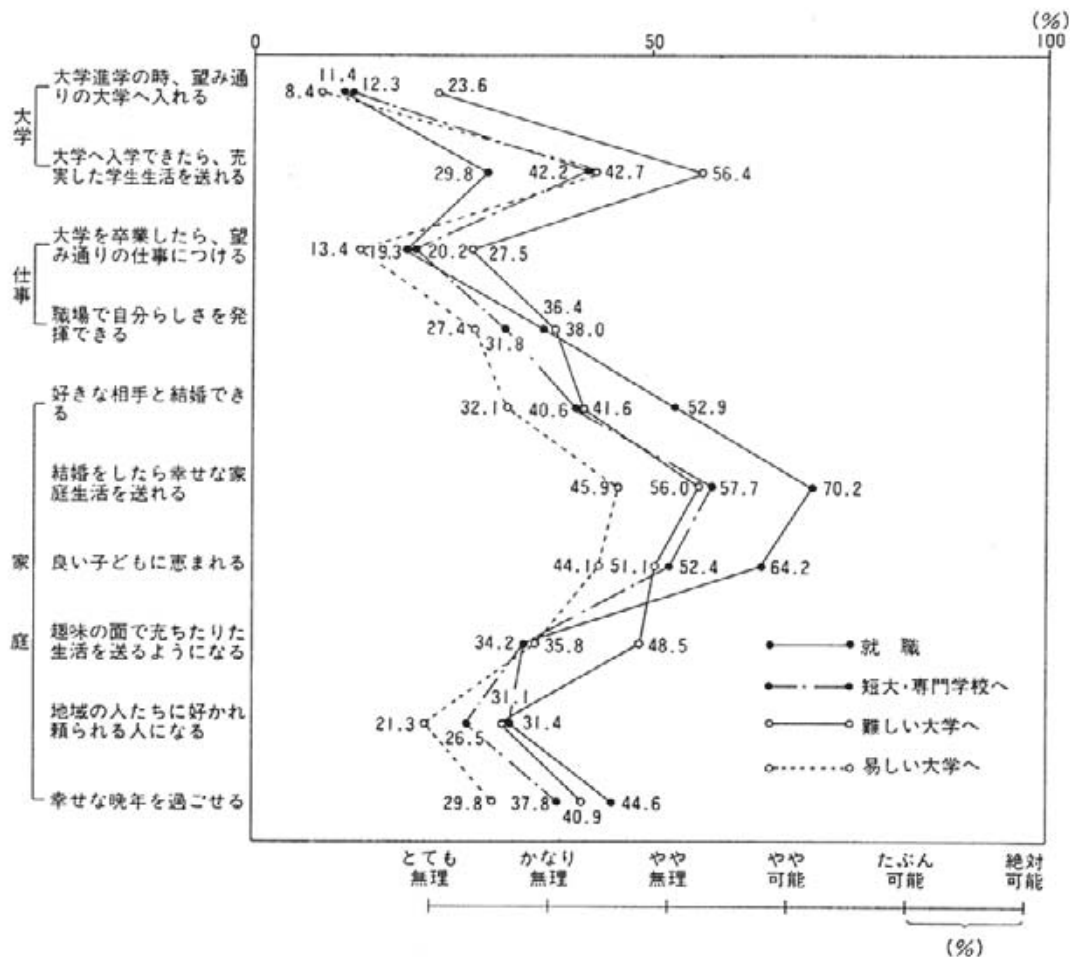
項目		尺 度				
		す ぐ に 動 め る	各種学校や 専門学校へ	短期大学へ	易 し い 大 学 へ	難 し い 大 学 へ
全 体		8.3	13.6	10.5	31.7	35.9
学 年	1 年	6.0	13.8	10.4	36.8	33.0
	2 年	8.9	13.9	9.6	27.9	39.7
	3 年	10.5	13.1	11.4	28.9	36.1
性 別	男 子	7.6	7.2	0.3	36.5	48.4
	女 子	9.2	20.8	22.2	26.1	21.7
成 績	得 意 群	9.5	7.2	3.6	19.4	60.3
	不 得 意 群	8.1	19.0	14.2	32.4	26.3
体 力	自 信 群	9.3	13.7	9.6	27.0	40.4
	不 自 信 群	7.7	13.4	11.3	36.6	31.0

	易しい大学へ		就職
幸せな家庭	46%	<	70%
良い子に恵まれる	44%	<	64%
幸せな晩年	30%	<	45%
職場で自分らしさを	27%	<	36%

(たぶん+絶対可能と思っている%)

となる。就職するからといって、暗い見通しを持っているのではなく、進学組よりは幸せな家庭を作れると思う割合が高いのが興味深い。換言するなら家庭生活の価値を見出したから、彼らは就職へと気持ちを傾斜したのであろう。

図II-4 将来の進路×将来展望



2. 職業についての見通し

すでにふれたように、生徒たちは、家庭生活はともあれ、職業生活には暗い見通しを抱いていた。そこで、もう少し未来の職業観をさぐってみよう。

まずいくつかの条件のことなる仕事を提示して、そうした仕事につきたいかどうかを尋ねてみた。結果は図Ⅱ-5に示した通りだが、「やや」を含めて、「個性を生かせるがとても疲れる仕事」に「つきたい」者は69%、「個性を生かせるが収入の少ない仕事」が58%、そして、「たくさん収入はあるが、とても疲れる仕事」46%とつづく。

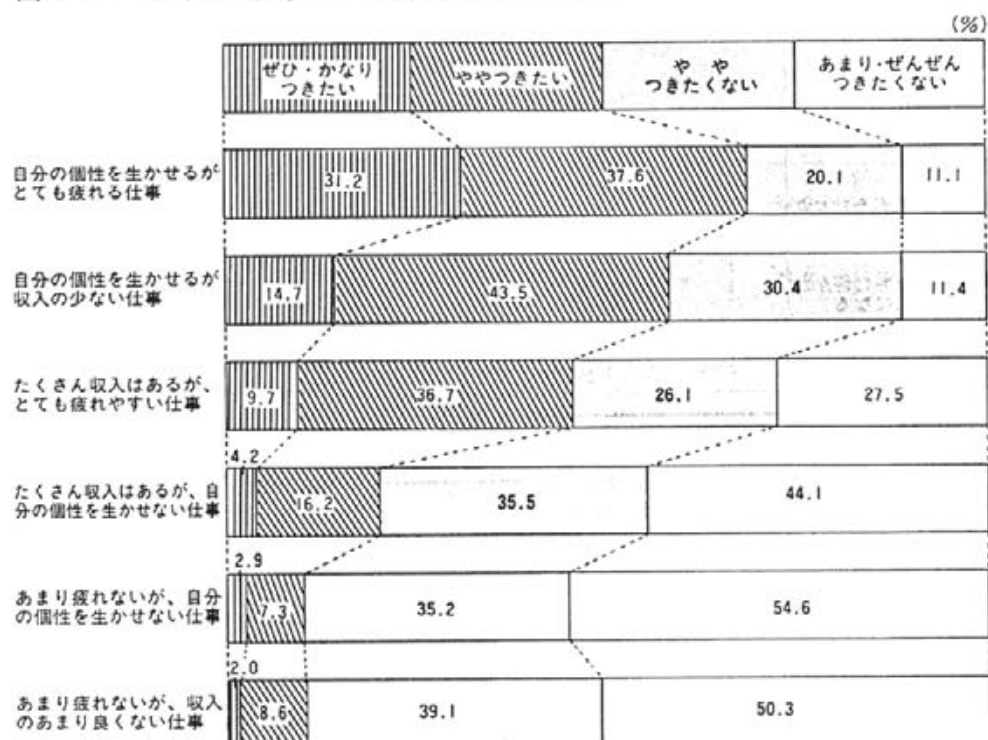
どうやらつきたい仕事の第一条件は、自分の個性に合って、それを発揮できることであり、その次がお金で、その条件が充たされる

ためには労力は惜しまないというように見える。現代の高校生は無気力でやる気に乏しいといわれるが、条件が充たされれば、仕事への意気込みを発揮するよう見える。

そこで、その意気込みのほどを、角度を変えた形で見たのが表Ⅱ-2である。これは、高校生に、「仮に一流といわれる会社に勤めたとしたら、定年までにどれくらいの地位につけると思うか」を尋ねた結果である。企業でトップの座を占めることのむつかしさをわかっていない、といえはそれまでだが、高校生なりに、夢を抱いているといえる数値である。

定年までにつけそうな地位は、「部長」が最も多くて30%、次いで「課長」の29%とな

図Ⅱ-5 つきたい仕事 — 個性を生かせる仕事を —



る。また一流企業で、「社長」の椅子まで獲得できていると思っている者も12%を占める。

なお、男女別に見ると、男子生徒の中では少なくとも部長まで昇れると考えている者が6割に達する。しかし、女子生徒も、6割が「課長」くらいにはなれると考えており、4割が「部長」以上にだってなれると希望を抱いている。よく三無主義、あるいは四無主義の高校生といわれるが、こうした結果からは彼らは彼らなりの希望の光を抱いているのがわかる。もっとも現代の若者は情報化社会にきたえられ、クールな距離感覚を身につけているといわれるが、それにしても、社長になれるが12%など、いささか現実とかけ離れた答え方をしているのが気付きである。

現代の高校生の行動領域は昔に比べて、せまくなってきている。家庭と学校の間を往復する毎日で、さらに広く家庭や学校をとりまく社会に接することが少ない。そのため、実体験を全く持たずに、社会認識が形づくられる結果を招く。そうした結果が、職業的な達成に対する認識の甘さをもたらしたのかもしれない。

そこで、やや設問の仕方を変えてみよう。表II-3に、いくつかの職種に対する達成の可能性を示した。「一生懸命やれば、絶対つける」と自信を抱く生徒は、いずれの項目とも1~4%で、「専門職といわれる仕事」を除くと、達成は「やや」~「とても」無理が、7割を超える。職業的な成功はおぼつかない

表II-2 一流企業に勤めたとしたら定年までにどれくらいの地位につけるか
—男子は部長位まで—

		(%)				
		係長	課長	部長	重役	社長
全	体	20.4	29.2	29.8	8.2	12.4
男	子	11.5	28.3	32.0	9.9	18.3
女	子	30.7	30.2	27.2	6.3	5.6
体 力	自信群	9.7	24.2	29.0	12.9	24.2
	不自信群	29.7	29.0	25.3	3.1	12.9
成 績	得意群	9.0	18.8	30.9	19.8	21.5
	不得意群	28.2	29.9	25.7	3.7	12.5
将 来 の 進 路	すぐに勤める	25.2	27.0	28.7	3.5	15.6
	大学へ	15.0	27.9	32.5	10.7	13.9
	短大・専門学校へ	34.0	32.6	22.9	3.8	6.7

という見方である。

こうした結果を、今までの数値と重ね合わせて考察するなら、おとなになったら幸せな家庭を作れると思う、そして、職業面では自分の個性を生かした仕事につきたいのだが、それは無理だろう、となると、社会的に尊敬されたり、人の上に立つ仕事にはつけないと思うとなる。家庭生活に対する自信と、職業に対する見通しの暗さとは、きわだった形でコントラストを描いているのが目につく。

そうした中で、図II-6・図II-7によれば、現在の自分について、自信を持てる生徒たちが、未来に対して、明るい見通しを抱いているのがわかる。未来といっても、漠然と存在するものでなく、現在の自分をふまえて、未来像が描かれる。ということは職業に対する見通しの暗さは、生徒たちの中で、現在、職業にかかわりあう領域、例えば、学業成績や頑張りぶりなどに自信を持っていない者が多いあらわれとも考えられる。しかし、そうした自己評価と未来像との関連は、もう少し後に、くわしくふれることにしたい。

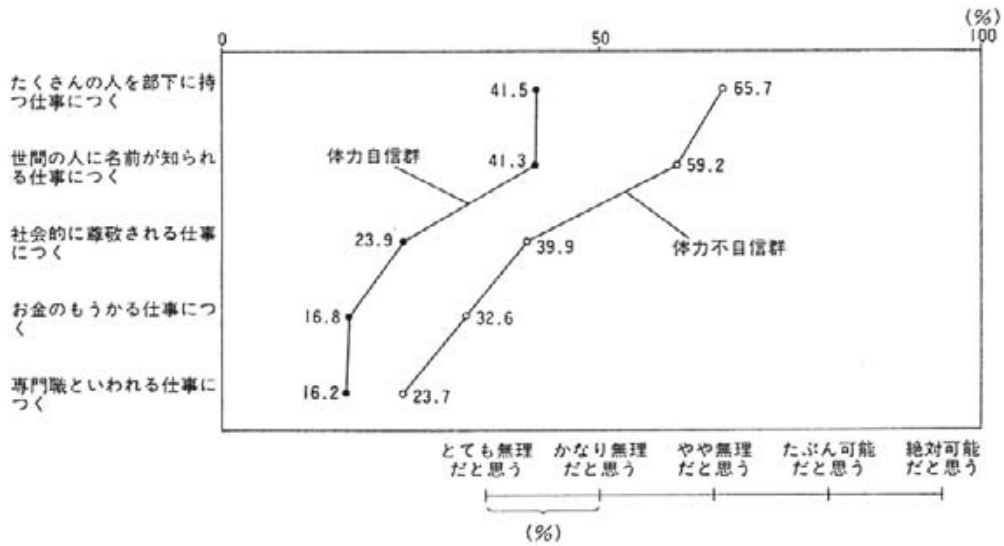
表II-3 職業の可能性

——断念する割合が高い——

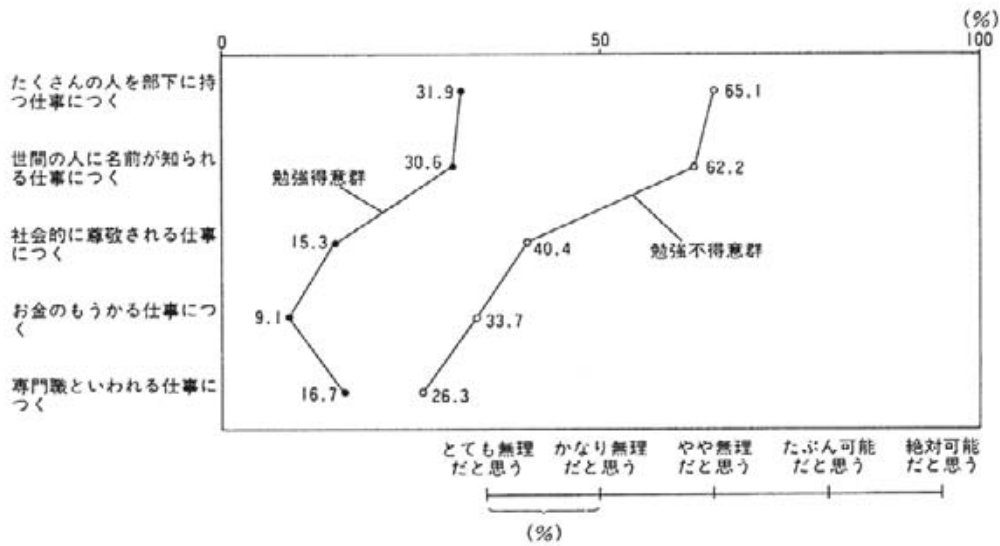
(%)

項目	尺度				
	絶対可能	たぶん可能	やや無理	かなり無理	とても無理
専門職といわれる仕事につく	3.7	40.7	37.0	12.1	6.5
	44.4			18.6	
お金のもうかる仕事につく	2.5	24.9	51.4	14.0	7.2
	27.4			21.2	
社会的に尊敬される仕事につく	1.7	19.6	50.0	18.5	10.2
	21.3			28.7	
世間の人に名前が知られる仕事につく	2.9	10.6	38.0	26.8	21.7
	13.5			48.5	
たくさんの人を部下に持つ仕事につく	1.6	9.5	39.4	30.2	19.3
	11.1			49.5	

図II-6 体力×職業への断念率



図II-7 成績×職業への断念率



3. 将来の生活に必要なもの

未来像というと、職業的な成功を視点にすえ、それとの関連の中で分析を試みるのは、古めかしい発想なのかもしれない。

仕事を手抜くというわけではないが、職業生活はほどほどにして、家庭生活を大事に生きていこうという生き方が若者の心をとらえていると聞く。

そこで、生徒たちに「どう生きたいか、どういう人間として評価されたいか」を尋ねることとした。結果は表II-4に示した通りである。

男女ともに支持されている生き方は、「平凡でいいから安定した人生を送りたい」で、「少しそう思う」を含めた肯定率は、男子74%、女子81%であり、次いで「人の役に立つ人間と思われたい」が男子の76%、女子の83%に達する。逆に圧倒的に否定されているのは、「人の上に立つ人間になりたい」で、否定する者の割合は、男子47%、女子65%である。男子と女子では、数字に多少の開きがあるが、世間でいわれる女子の特性が出ているように思われる。この結果を要約するなら、「周囲の人々から、役に立つ、または頼りになる人間のように思われたいが、人の上に立つという役割はとりたくない。むしろ平凡でいいから安定した人生を送りたい」ということになろうか。大志を抱かない安定志向型の人生観であろう。

しかし、一つだけの結果から、生徒たちが安定志向をしていると要約するのは危険かもしれない。

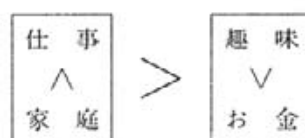
表II-5は、高校生にAとB、それぞれ2通りの生活の仕方を挙げ、どちらの人生を送りたいのか選んでもらった、男女別の結果である。男女ともなによりも「幸せな家庭を作る」ことを第一とし、次に「自分の才能を生かせる仕事につく」「自分の趣味を大事に生

きる」とつづき、一番価値を置かれていないのは、「お金のもうかる仕事につく」であるように見える。

そこで、全体の反応が6割以上に達した項目に不等号をつけると、表II-5の結果を、以下の通りに要約できよう。

家庭	86%	>	14%	趣味……①
仕事	81%	>	19%	趣味……②
趣味	57%	≒	43%	お金……③
仕事	44%	≒	56%	家庭……④
お金	25%	<	75%	仕事……⑤
お金	14%	<	86%	家庭……⑥

これらは、家庭、趣味、仕事、お金の4つの領域間の重みを尋ねているが



が全体の傾向となる。つまり、お金や趣味はともかく、家庭を大事に、そして、仕事を大切にしたい生き方をしたい、その中で、どうしてもひとつというのなら、家庭生活をとりたいたいという考え方で、今どきの若い人という言葉がふさわしくないくらい、堅実な人生観があらわれている。

このように生徒たちは、家庭生活を大事に、次いで仕事を大切に生きていきたいという。それでは「幸せな生活を送る」ためにどんな条件が必要と考えているのであろうか。図II-8に目を通してほしい。「とても必要」に着目してみると、1位が「休が丈夫」の71%、以下「良い家庭に恵まれる」の63%、「仕事の仲間から信頼される」55%とつづく。逆に、一番必要とされていないのは「一流大学を卒業する」で、「あまり、あるいは、ぜんぜん」いらないと考えている者が6割に近い。

そこで、もう少しはっきりと、生徒たちに「幸せな生活を送るために必要なもの」に「大切さ」の順位をつけてもらった。結果は表II-6が示す通り、一番大切なのは「健康」であり、1位と答えた割合が50%、2位が18%、3位が15%で、3位までに「健康」を挙げた生徒が、83%を占める。

以下、2位が「誰からも好かれる性格」、3位「良い家庭に恵まれる」そして、「自分に合った仕事」が並ぶ。なお、最も大切と思われるのではないのは、「お金をたくさんもうける」、「良い学歴を身につける」である。

こうした結果に納得できる反面、「一流の大学を卒業する」の評価が、極端なまでに低い

表II-4 ありたい人生(性別)

— 平凡でもいいから安定した人生を —

(%)

項目	尺度	いつもわりと そう思っている		少しそう思っている	あまり ぜんぜん そう思わない	
平凡でいいから安定した人生を送りたい	男子	18.1	29.1	26.9	17.1	8.8
		└─47.2─┘			└─25.9─┘	
	女子	22.1	32.9	26.2	15.3	3.5
		└─55.0─┘			└─18.8─┘	
人の役に立つ人間と思われたい	男子	16.4	25.7	33.7	17.8	6.4
		└─42.1─┘			└─24.2─┘	
	女子	12.4	34.9	35.3	14.3	3.1
		└─47.3─┘			└─17.4─┘	
頼りになる人間と人から思われたい	男子	12.7	25.9	38.2	16.7	6.5
		└─38.6─┘			└─23.2─┘	
	女子	12.2	30.3	40.2	14.2	3.1
		└─42.5─┘			└─17.3─┘	
あまり目立たないふつうの人でありたい	男子	8.4	19.1	31.8	30.4	10.3
		└─27.5─┘			└─40.7─┘	
	女子	10.1	23.6	33.5	26.5	6.3
		└─33.7─┘			└─32.8─┘	
友だちの中で人気者になりたい	男子	6.7	17.9	35.5	31.6	8.3
		└─24.6─┘			└─39.9─┘	
	女子	7.5	10.9	40.1	25.8	5.7
		└─28.4─┘			└─31.5─┘	
優秀であると人から思われたい	男子	8.3	16.1	37.9	28.5	9.2
		└─24.4─┘			└─37.7─┘	
	女子	3.3	16.1	40.9	32.7	7.0
		└─19.4─┘			└─39.7─┘	
人の上に立つ人間になりたい	男子	8.2	14.7	30.1	34.6	12.4
		└─22.9─┘			└─47.0─┘	
	女子	1.8	9.9	23.5	51.9	12.9
		└─11.7─┘			└─64.8─┘	

のが注目をひく。高学歴社会に対する若者らしい反発の気持ちなのか、それとも、本当にそう信じているのであろうか。

図II-9は、社会的に成功する条件について、その必要度を尋ねた結果である。

「とても必要」に注目して、社会的に成功する条件のベスト3を挙げると、1位「仕事の仲間から信頼される」67%、2位「頑張り

強い」64%、3位「体が丈夫」60%となる。健康であることはもちろん、仲間からの人望が厚く、努力家であることが、社会的成功を握る鍵と生徒たちは見ている。なお、ここで気になるのは、「一流の大学を卒業する」を「かなり必要」と思う者は6%にすぎず、「あまり、あるいは、ぜんぜんいらない」と考えている生徒が4割に達している事実であろう。

表II-5 生活の仕方(性別)

—家庭生活を大事にしたい—

(%)

A		ぜ ひ	ま あ	ま あ	ぜ ひ	B	
幸せな家庭を作る	男子	41.3	42.4	10.6	5.7	男子	自分の趣味を大事に生きる
		83.7		16.3			
	女子	48.4	39.7	8.4	3.5	女子	
		88.1		11.9			
自分の才能を生かせる仕事につく	男子	38.2	40.5	14.6	6.7	男子	自分の趣味を大事に生きる
		78.7		21.3			
	女子	41.1	43.3	11.3	4.3	女子	
		84.4		15.6			
自分の趣味を大事に生きる	男子	26.9	31.6	28.4	13.1	男子	お金のもうかる仕事につく
		58.5		41.5			
	女子	20.5	34.0	34.3	11.2	女子	
		54.5		45.5			
自分の才能を生かせる仕事につく	男子	20.1	25.9	29.9	24.1	男子	幸せな家庭を作る
		46.0		54.0			
	女子	19.2	23.5	28.8	28.5	女子	
		42.7		57.3			
お金のもうかる仕事につく	男子	11.5	18.2	32.1	38.2	男子	自分の才能を生かせる仕事につく
		29.7		70.3			
	女子	6.4	13.7	39.1	40.8	女子	
		20.1		79.9			
お金のもうかる仕事につく	男子	6.8	11.9	28.9	52.4	男子	幸せな家庭を作る
		18.7		81.3			
	女子	2.5	7.5	24.0	66.0	女子	
		10.0		90.0			

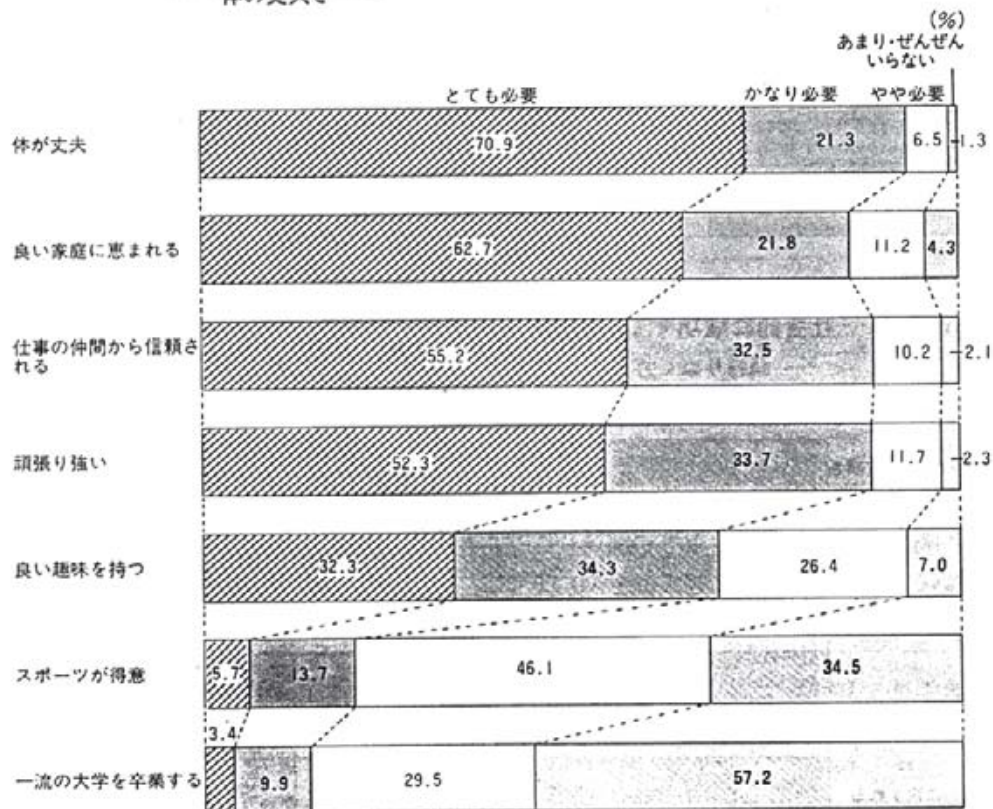
なお、表II-7・表II-8は、すでにふれた「幸せな生活」と「社会的な成功」を送るための条件を進路別に集計したものだが、そうした条件についての見方が、進路によって、かわっていないのが目につく。もちろん、大学進学予定者は、幸せな生活を送り、そして、社会的に成功するために、大学卒業という条件が必要になると思う割合が高い。しか

し、その割合が、それほど開いていないのは、すでに述べた通りである。

したがって、こうしたデータだけを見ていると、日本では、学歴の値打ちが低下し、大学進学競争など、存在しないように思える。未来の生活に、学歴はそれほどの意味を持ちえないと、生徒たちは本当に考えているのであろうか。

図II-8 「幸せな生活を送る」条件

—体の丈夫さ—



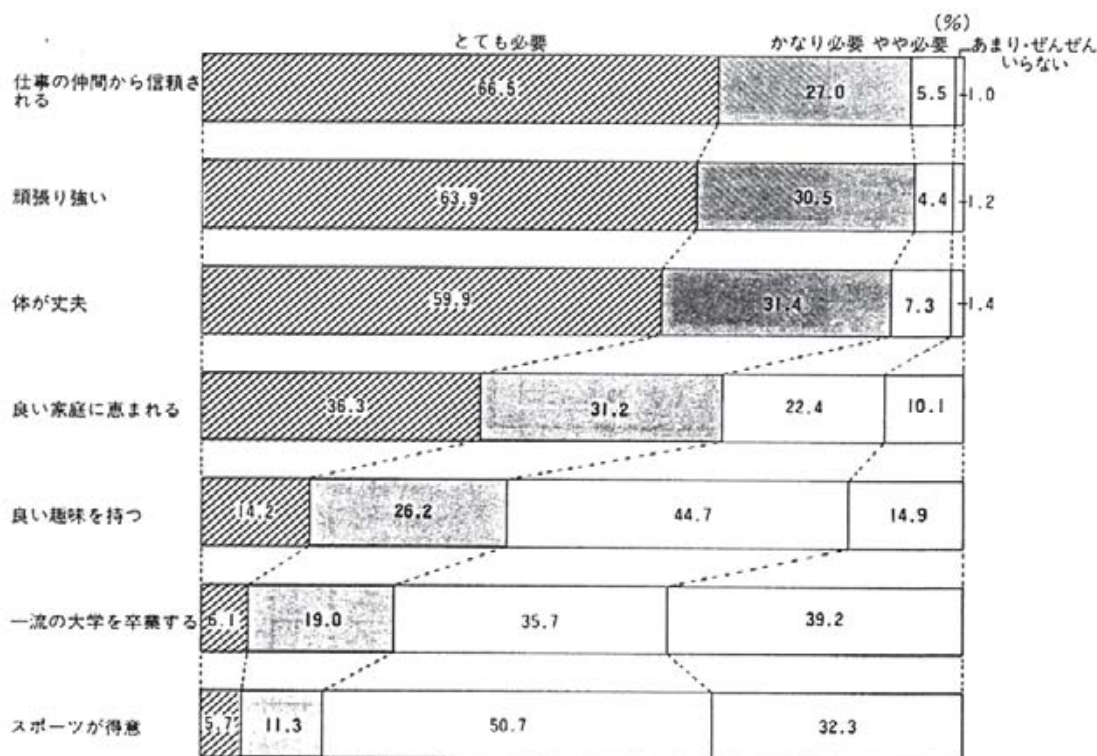
表II-6 幸せな生活を送るために、大切さの順位

—健康そして性格—

項目	順位							
	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	平均
健康に恵まれる	49.8	18.2	14.9	9.9	5.3	1.6	0.3	2.1位
誰からも好かれる性格	20.0	27.8	21.3	16.0	10.3	3.5	1.1	2.8
良い家庭に恵まれる	14.6	20.3	20.6	15.8	17.4	7.3	4.0	3.4
自分に合った仕事につく	14.5	15.4	15.5	23.6	22.8	6.1	2.1	3.5
やる気がある	10.6	14.5	17.9	21.3	21.5	8.7	5.5	3.8
お金をたくさんもうける	3.4	4.0	5.8	6.3	12.4	44.7	23.4	5.5
良い学歴を身につける	1.4	3.2	4.1	2.9	6.6	23.6	58.2	6.1

図II-9 「社会的に成功する」条件

—頑張りぬく力—



表II-7 将来の進路×社会的に成功する条件

(%)

条件 \ 進路	すぐに勤める	短大・専門学校へ	大学へ
仕事の仲間から信頼される	(1位) 95.0	(3位) 94.3	(2位) 93.1
頑張り強い	(3位) 90.9	(1位) 96.0	(1位) 94.5
体が丈夫	(2位) 91.7	(2位) 94.6	(3位) 90.0
良い家庭に恵まれる	(4位) 69.4	(4位) 64.1	(4位) 69.1
良い趣味を持つ	(5位) 35.0	(5位) 34.7	(5位) 43.6
一流大学を卒業する	(7位) 13.2	(6位) 18.6	(6位) 29.2
スポーツが得意	(6位) 20.0	(7位) 13.5	(7位) 17.4

ととも
必要
 かなり
必要
 やや
必要
 あまり
いらない
 ぜんぜん
いらない
 (%)

表II-8 将来の進路×幸せな生活を送る条件

(%)

条件 \ 進路	すぐに勤める	短大・専門学校へ	大学へ
体が丈夫	(1位) 93.4	(1位) 95.4	(1位) 91.2
良い家庭に恵まれる	(4位) 85.1	(3位) 87.1	(4位) 83.7
仕事の仲間から信頼される	(2位) 92.6	(2位) 89.1	(2位) 86.7
頑張り強い	(3位) 87.5	(4位) 86.8	(3位) 85.7
良い趣味を持つ	(5位) 60.4	(5位) 60.7	(5位) 69.7
スポーツが得意	(6位) 15.7	(6位) 14.0	(6位) 21.2
一流の大学を卒業する	(7位) 6.7	(7位) 5.5	(7位) 16.9

ととも
必要
 かなり
必要
 やや
必要
 あまり
いらない
 ぜんぜん
いらない
 (%)